

令和5年度病害虫発生予報第4号

長崎県病害虫防除所長

【予報の概要】

農作物名	病 害 虫 名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
早期水稲	いもち病（穂いもち） （防除情報第5号継続）		やや多
	紋枯病	並	やや多
	穂吸汁性カメムシ類	並	並
普通期水稲	いもち病（葉いもち）	並	並
	紋枯病	並	やや多
	縞葉枯病	やや少	やや少
	セジロウンカ	やや少	やや少
	トビイロウンカ	やや少	並
	コブノメイガ	並	並
大豆	ハスモンヨトウ		並
いちご （育苗床）	うどんこ病	やや少	やや少
	炭疽病	並	並
	ハダニ類	並	並
アスパラガス	斑点性病害（褐斑病、斑点病）	並	並
	アザミウマ類	やや多	やや多
かんきつ	かいよう病（注意報第2号）	多	多
	黒点病	少	少
	ミカンハダニ	少	やや少
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多
びわ	がんしゅ病（防除情報第6号）	多	多
	灰斑病	少	少
	ナシヒメシンクイ	並	並
果樹共通	カメムシ類	少	少
茶	炭疽病（注意報第1号継続）	多	多
	チャノキイロアザミウマ	やや少	やや少
	チャノコカクモンハマキ	やや多	やや多
	チャノホソガ	やや多	やや多
	カンザワハダニ	少	少
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	並
	クワシロカイガラムシ	並	並

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

早期水稲

1. いもち病（穂いもち）

令和5年7月5日付け病害虫発生予察防除情報第5号を継続。

なお、その後の発生状況については、以下のとおりである。

（1）発生状況等

ア 7月前期の巡回調査（34筆）の結果、葉いもちの発病株率は4.4%

（2.9%）、発生圃場率は44.1%（29.1%）であり、一部に多発圃場も

見られた。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発病株率 1.0%）。

ウ 出穂期前後にあたる7月上旬の降水量は平年より多かった。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 葉いもちの発生が認められる圃場では、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を行う。また、穂ばらみ期を過ぎた圃場で葉いもちが多発している場合、穂揃期とその7～10日後に防除を行う。

イ 追肥を行う場合は、過剰にならないよう適正量を施肥する。

## 2. 紋枯病

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査（34筆）の結果、発病株率は0.5%（0.3%）、発生圃場率は11.8%（9.2%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発病株率は63.0%（35.9%）であった。

ウ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並の見込みであり本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

## 3. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期のイネ科雑草におけるすくい取り調査（21地点）の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は3.1頭（6.9頭）であった（表）。

種類別	10回すくいとり当り虫数						発生地点率	
	R1	R2	R3	R4	平年	R5	平年	R5
ホソハラカメムシ	0.2	0.8	0.3	0.8	0.7	0.3	57.9	57.1
クモヘリカメムシ	0.2	0.0	0.0	0.2	0.3	0.1	22.5	9.5
シラホシカメムシ	0.2	0.1	0.0	0.0	0.1	0.1	29.1	19.0
アカスジカスミカメ	5.0	1.8	2.8	7.0	5.9	2.5	80.4	61.9
ミナミアオカメムシ	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.0	0.0
計	5.3	2.3	2.9	8.4	6.9	3.1	89.3	90.5

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

イ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並の見込みであり本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の水田周辺の雑草地を除草すると本田へのカメムシ類の飛来を助長するので行なわない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。また、周辺雑草地も含めて広域一斉防除をおこなうと防除効果が高まる。

ウ ミナミアオカメムシは斑点米を発生させる能力が高いので圃場での発生に注意する。また一部の薬剤で感受性の低下が報告されているので、薬剤の選定にあたっては十分注意する。

## 普通期水稻

### 1. いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査(69筆)の結果、葉いもちの発病株率は0.1%(0.1%)、発生圃場率は4.3%(2.9%)であった。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(過去10か年平均 発病株率0.4%)。
- ウ 葉いもちの感染に好適な条件を満たした日は下表のとおりである(葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照)。

月日	鰐浦	巖原	芦辺	平戸	松浦	佐世保	西海	有川	長崎	島原	福江	口之津	脇岬
7/1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/2	-	-	-	-	-	-	2	-	2	2	-	2	2
7/3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
7/4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
7/5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	3	-
7/7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/8	-	-	3	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
7/9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
7/11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
7/13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/15	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/16	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7/17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
発生指標	?:判定不能		-:好適条件なし		1:準好適条件1	2:準好適条件2	3:準好適条件3	4:準好適条件4	:好適条件				

\* 感染した場合、感染好適と判断された日から7~10日後に病斑発現

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 余り苗、補植苗は発病の伝染源となるので早めに処分する。
- イ 葉いもちの急性型病斑が見られた場合は早急に防除を行う。
- ウ 葉いもちの発生が認められる圃場では、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を行なう。

2. 紋枯病

(1) 予報内容: 発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査(69筆)の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は1.0%(発生を認めない)であった。
- ウ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並の見込みであり本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容: 発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査(69筆)の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。
- イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生を認めない)。

- ウ 7月前期の巡回調査(69筆)の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.0頭(0.0頭)、発生圃場率は20.3%(20.5%)であった。
- エ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、ヒメトビウンカの発生を認めなかった(株当たり虫数 0.2頭、寄生株率 11.0%)。
- オ 本年5月の小麦圃場及びイネ科雑草地(14地点、1地点あたり概ね5圃場)において捕獲したヒメトビウンカについて、イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率調査(簡易エライザ法)を行った結果、保毒虫率は0.4%(0.3%)と平年並であった。

#### 4. セジロウンカ

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠
  - ア 7月前期の巡回調査(69筆)の結果、株当たり虫数は0.1頭(0.2頭)、発生圃場率は27.5%(43.4%)であった。
  - イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、株当たり虫数は6.0頭(1.7頭)、寄生株率は25.5%(62.2%)であった。

#### 5. トビイロウンカ

- (1) 予報内容：発生程度 並
- (2) 予報の根拠
  - ア 7月前期の巡回調査(69筆)の結果、株当たり虫数は0.0頭(0.0頭)、発生圃場率は1.4%(5.4%)であった。
  - イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生は認められなかった(株当たり虫数0.1頭、寄生株率6.3%)。
  - ウ 予察灯において五島市で7月1日、南島原市で7月9日、諫早市で7月10日に誘殺を認め、ネットトラップにおいて諫早市で7月10日に確認された(表)。
  - エ 向こう1か月の気温は高く、降水量は平年並の見込みであり本虫の発生に好適である。

表 トビイロウンカの誘殺状況(令和5年)

月・日	トビイロウンカ				
	諫早			北有馬	岐宿
	白熱	ネットA	ネットB	白熱	白熱
7/1	0	0	0	0	4
7/2	0	0	0	0	0
7/3	0	0	0	0	0
7/4	0	0	0	0	0
7/5	0	0	0	0	0
7/6	0	0	0	0	
7/7	0	0	0	0	
7/8	0	0	0	0	
7/9	0	0	0	1	
7/10	1	1	0	0	
7/11	0	0	0	0	
7/12	0	0	0		
7/13	0	0	0		
7/14	0	0	0		
7/15	0	0	0		
7/16	0	0	0		
7/17	0	0	0		

ネットトラップ ネットA: 予察圃場横、ネットB: 防除所横  
データ欄空欄は未調査

- (3) 防除上注意すべき事項
  - ア 今後の圃場での発生状況に注意し、7月下旬～8月上旬にかけて100株当たり20頭以上の成虫の寄生が認められる場合は、幼虫ふ化揃い期に防除を行う。
  - イ 株元に多く寄生するので薬剤散布にあたっては株元に薬剤が十分付着するよう

丁寧に散布する。

ウ 圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、できるだけ圃場の見回りを徹底する。また、飛来波の今後の発生予測は図1のとおりであるが、地域や圃場により発生状況が異なることがあるので、それぞれの圃場における発生状況を把握した上で防除を行う。

## 6. コブノメイガ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬以降フェロモントラップ(諫早市)への誘殺が認められ、誘殺数は平年並で推移している。

イ 県内各地(大村市、佐々町)のフェロモントラップでは、6月6半旬に佐々町、7月1半旬に大村市で誘殺を確認した。

ウ 7月前期の巡回調査(69筆)の結果、食害株率は1.7%(0.3%)、発生圃場率は34.9%(6.6%)であった。

エ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、食害株率は1.0%(6.4%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

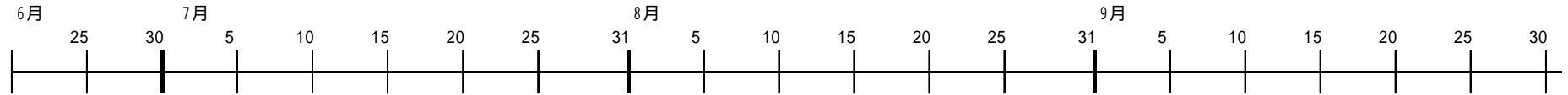
圃場間や同一圃場内でも偏って発生していることが多いので、圃場の見回りを徹底する。薬剤散布は、粉剤・液剤では成虫発生最盛期の7~10日後、粒剤では成虫発生最盛期に行う。

表 コブノメイガの誘殺状況(令和5年)

月・日	コブノメイガ			
	諫早		大村	佐々
	フェロモン トラップA	フェロモン トラップB	フェロモン トラップ	フェロモン トラップ
6/21	0	0	}	}
6/22	2	0		
6/23	0	0		
6/24	1	0		
6/25	0	4		
6/26	1	0	}	}
6/27	0	0		
6/28	0	0		
6/29	0	0		
6/30	5	0		
7/1	4	0	}	}
7/2	10	4		
7/3	5	3		
7/4	10	3		
7/5	5	3		
7/6	0	3	}	}
7/7	0	4		
7/8	0	2		
7/9	0	1		
7/10	1	3		
7/11	0	0	}	}
7/12	0	0		
7/13	1	2		
7/14	0	0		
7/15	0	0		
7/16	0	0		
7/17	0	0		

フェロモントラップ A: 予察圃場、B: 作物研究室圃場  
データ欄空欄は未調査

(図1) トビロウカの発生予測図(令和5年)



(飛来日)  
7月1日  
主飛来

成虫	卵	第一世代幼虫	成虫	卵	第二世代幼虫	成虫	卵	第三世代幼虫	成虫
----	---	--------	----	---	--------	----	---	--------	----

(飛来日)  
7月10日

成虫	卵	第一世代幼虫	成虫	卵	第二世代幼虫	成虫	卵	第三世代幼虫
----	---	--------	----	---	--------	----	---	--------

(図2) コブノメイガの発生予測図(令和5年)

(飛来日)  
6月22日  
主飛来

成虫	卵	第一世代幼虫	蛹	成虫	卵	第二世代幼虫	蛹	成虫	卵	第三世代幼虫	蛹	成虫	卵
----	---	--------	---	----	---	--------	---	----	---	--------	---	----	---

(飛来日)  
6月30日  
主飛来

成虫	卵	第一世代幼虫	蛹	成虫	卵	第二世代幼虫	蛹	成虫	卵	第三世代幼虫	蛹
----	---	--------	---	----	---	--------	---	----	---	--------	---

発生予測の気温は諫早市貝津町(農林技術開発センター)のデータを用いた(6/1~7/17実測値、7/18以降は平年値)

## 大豆

### 1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ（諫早市）の誘殺量は平年並で推移している（図）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期に薬剤散布する。

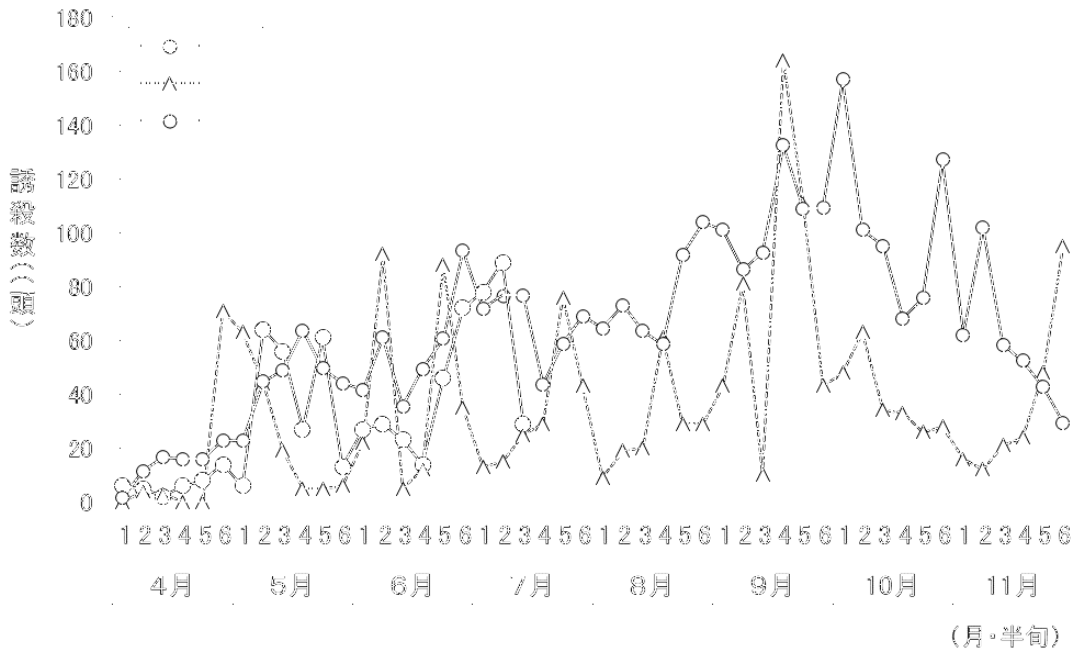


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越町)

## いちご（育苗床）

### 1. うどんこ病

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（30筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率 0.5%、発生圃場率 5.8%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

本病菌の本圃への持ち込みを防ぐため、定期的な防除を行う。特に「恋みのり」は「ゆめのか」に比べて葉で本病が発生しやすいため留意する。

### 2. 炭疽病

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査（30筆）の結果、発病株率 0.0%（0.1%）、発生圃場率は 3.3%（3.6%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗床が多湿にならないように、長時間のかん水はしない。ポット間隔を十分にとり、排水対策を確実にを行う。また、除草を徹底するなど、環境整備に努める。

イ 育苗床は全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。また、雨よけ施設がある育苗床では雨よけを行う。

ウ 発病した子苗およびその周辺の苗は速やかに処分する。除去した発病株や茎葉

は、圃場内やその周辺に放置しない。

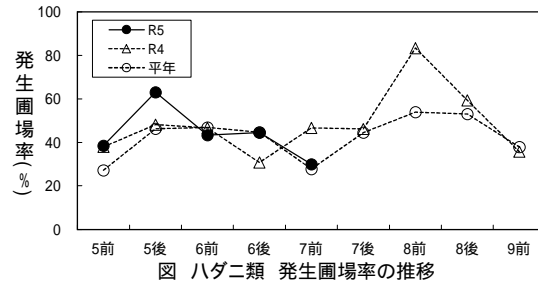
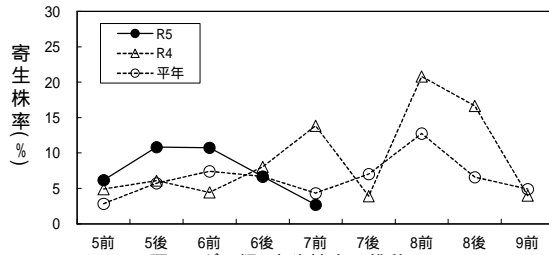
エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に長雨、台風などの前後、下葉除去など、株を傷つけるような作業後は重点的に行う。

### 3. ハダニ類

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(30筆)の結果、寄生株率は2.7%(4.3%)、発生圃場率は30.0%(27.8%)であった。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗による本圃への持ち込みを防ぐため、定植前までの防除を徹底する。

イ 土着天敵の活動が活発になる時期であり、天敵への影響が大きい有機リン系・カーバメート系・合成ピレスロイド系薬剤の使用は避け、気門封鎖剤等の天敵に影響の少ない薬剤を積極的に使用する。なお、気門封鎖剤は卵に対する効果が低いので5～7日おきに連続散布を行う。

ウ 下葉の葉裏に多く寄生するので、薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布する。

エ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統の薬剤(令和5年長崎県病害虫防除基準P214～217の「作用機構による分類(IRAC)」参照)の連用を避け、薬剤感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤や異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

## アスパラガス

### 1. 斑点性病害

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、発病側枝率は0.3%(0.6%)、発生圃場率は33.3%(20.2%)であった。

### 2. アザミウマ類

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、払い落とし虫数(10.5cm×22.5cm白色板に5回×10か所)は15.9頭(13.5頭)、発生圃場率は75.0%(58.0%)であった。一部多発圃場が見られた。



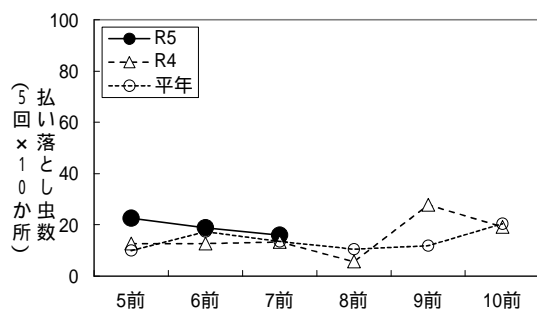


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移  
払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

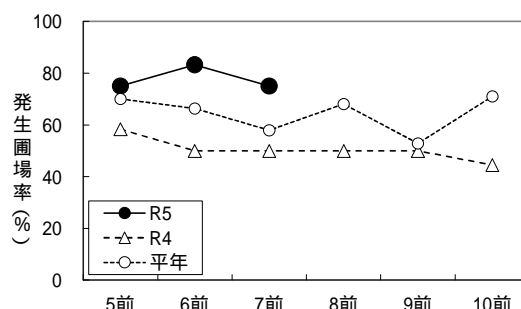


図 アザミウマ類 発生圃場率の推移

### (3) 防除上注意すべき事項

- ア ハウス内および周辺の雑草は本虫の生息・増殖源となるので除去する。
- イ 薬剤散布は株の内部まで十分付着するよう丁寧に行う。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統の薬剤（令和5年長崎県病害虫防除基準 P282～283の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の連用を避け、薬剤感受性低下の恐れが少ない気門封鎖剤や異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

## かんきつ

### 1. かいよう病

令和5年7月19日付け**病害虫発生予察注意報第2号**による。

### 2. 黒点病

- (1) 予報内容：発生程度 少
- (2) 予報の根拠  
7月前期の巡回調査（36筆）の結果、発生を認めなかった（発病果率0.7%、発生圃場率6.8%）。
- (3) 防除上注意すべき事項
  - ア 今後の気象（降雨）の推移に留意し、防除適期を逸さないよう努める。
  - イ 臨機防除で薬剤を追加散布する場合は、各薬剤の使用回数に注意する。
  - ウ 枯れ枝が伝染源となるので、管理作業と併せて剪除する。

### 3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容：発生程度 やや少
- (2) 予報の根拠  
ア 7月前期の巡回調査（36筆）の結果、寄生葉率は0.6%（10.1%）、発生圃場率は8.3%（38.6%）であった。  
イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。
- (3) 防除上注意すべき事項  
薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準 P386～389およびP394～397の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

### 4. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容：発生程度 やや多
- (2) 予報の根拠  
ア 7月前期の巡回調査（36筆）の結果、果梗部の被害果率は0.1%（0.3%）、発生圃場率は8.3%（7.7%）、果頂部の被害果率は0.1%（0.2%）、発生圃場率は5.6%（2.1%）であった。  
イ 黄色粘着トラップ（諫早市）による誘殺量は、6月4半旬以降、概ね平年並で

推移している(図)。

ウ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

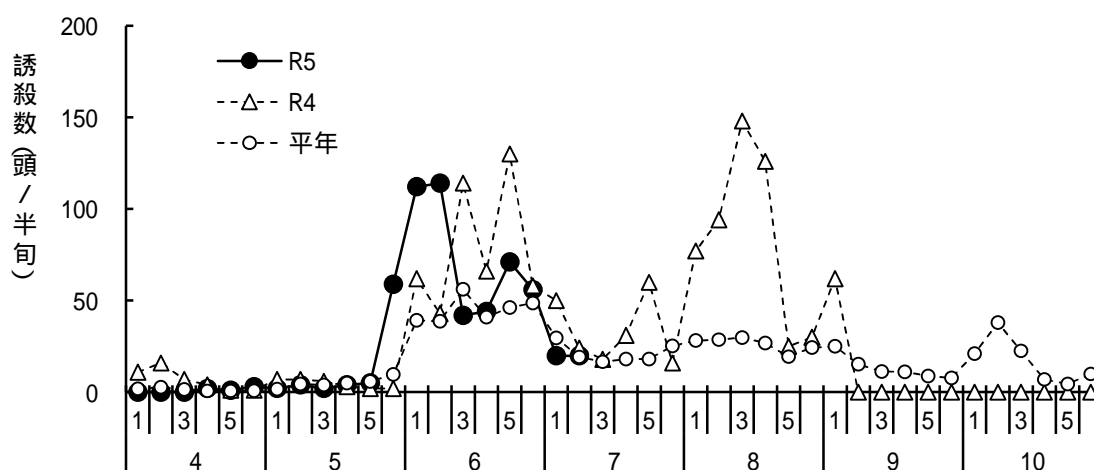


図 チャノキイロアザミウマの誘殺状況  
(諫早市小船越町:黄色粘着トラップ) (月・半旬)  
7月3半旬は強風による粘着板紛失のため欠測

(3) 防除上注意すべき事項

ア 気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した発生ピーク予測日を下表に示した。

イ 茶、かき、ぶどう及びイヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 有効積算温度計算シミュレーションによるチャノキイロアザミウマ成虫の発生ピーク予測日

地点	長崎	佐世保	口之津	平戸
第4世代	7/10	7/10	7/12	7/21
" (平年)	7/18	7/20	7/19	7/31
" (前年)	7/12	7/12	7/15	7/23
第5世代	7/27	7/27	7/29	8/8
" (平年)	8/3	8/5	8/5	8/18
" (前年)	7/29	7/29	8/1	8/9
第6世代	8/12	8/12	8/14	8/26
" (平年)	8/20	8/21	8/21	9/6
" (前年)	8/14	8/14	8/18	8/26

注1: 発生ピーク予測日は気象庁アメダスの気温データを用いて有効積算温量により算出した。なお、積算には7月14日までは観測値を、以降は平年値を使用した。

注2: 同一地区内でも、山間部では発生ピーク予測日が異なる場合があるので注意する。また、今後の気象条件により予測日は前後する場合がある。

注3: 表中の発生ピーク予測日の5日前から発生ピーク予測日の期間に薬剤散布をすると防除効果が高い。なお発生が多い園では、1果当たり寄生虫数が0.1頭に達する前に防除を行う。

びわ

1. がんしゅ病

令和5年7月19日付け病害虫発生予察防除情報報第6号による。

2. 灰斑病

(1) 予報内容: 発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(10筆)の結果、発生枝葉率は1.0%(25.6%)、発生圃場率は20.0%(97.5%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

発生圃場では新葉の感染防止および果実腐敗の発生抑制のため、薬剤防除を行い病原菌密度の低下を図る。

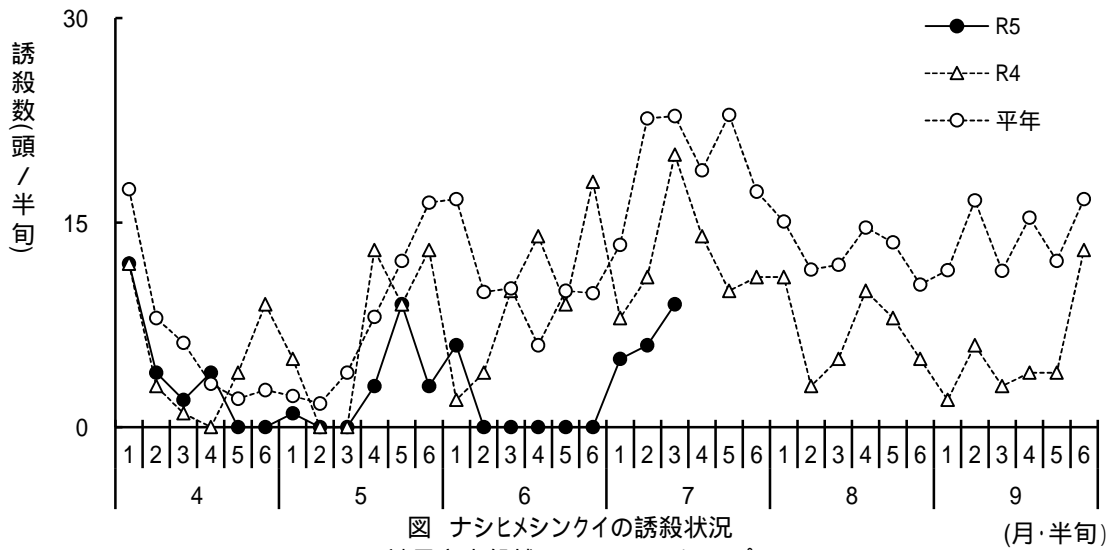
3. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(10筆)の結果、寄生枝葉率は0.6%(0.0%)、発生圃場率は20.0%(1.3%)であった。

イ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺数は平年より少なく推移している(図)。



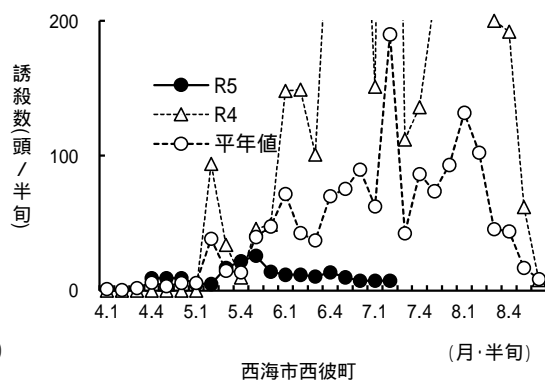
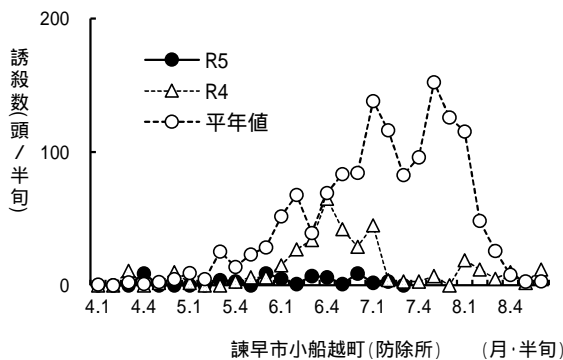
果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ(諫早市、西海市、南島原市)の誘殺量は平年より少ない(図)。



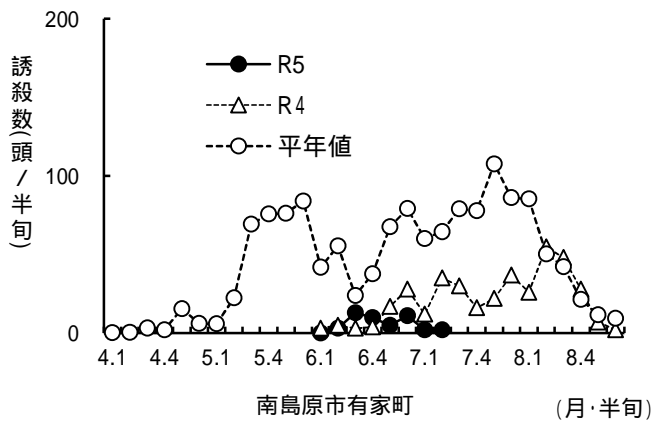


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコール)

**茶**

1. 炭疽病

令和5年7月5日付け病害虫発生予察注意報第1号を継続。

なお、その後の発生状況については以下のとおりである。

(1) 発生状況等

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、1㎡当たり発病葉数は11.8枚(3.7枚)、発生圃場率は83.3%(57.8%)であった。

(2) 防除上注意すべき事項

薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統(令和5年長崎県病害虫防除基準P426~427の「作用機構による分類(FRAC)」参照)の薬剤は連用しない。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容：発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月前期の巡回調査(12筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は2.9頭(13.9頭)、発生圃場率は66.7%(93.1%)であった。

3. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月前期の巡回調査(12筆)の結果、1㎡あたり巻葉数は1.7枚(0.3枚)、発生圃場率は58.3%(16.1%)であった。

イ フェロモントラップ(東彼杵町)による誘殺数は平年並~やや少なく推移している(図)。

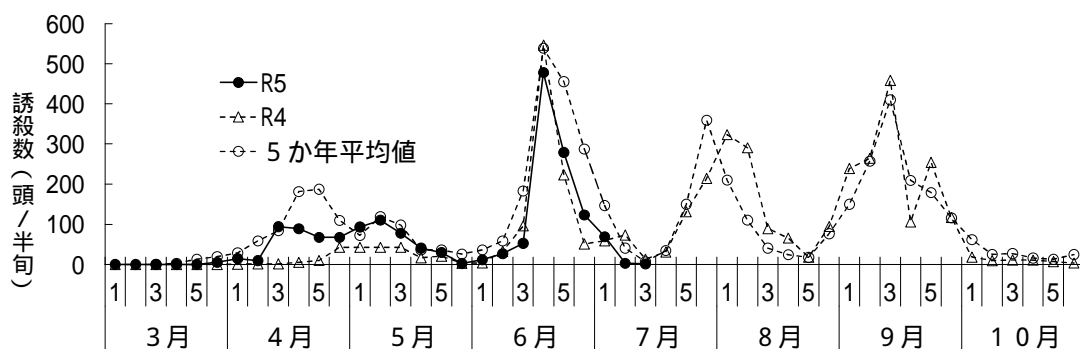


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況(東彼杵町：フェロモントラップ)(月・半月) 茶業研究室調べ

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期のころ、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。
- イ 三番茶を摘採中あるいは近日中に摘採予定の圃場では、摘採終了後に防除を実施する。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準 P428～429の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

4. チャノホソガ

(1) 予報内容：発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、1㎡あたり巻葉数は0.5枚（0.1枚）、発生圃場率は33.3%（7.9%）であった。
- イ フェロモントラップ（東彼杵町）による誘殺数は、平年より少なく推移している（図）。

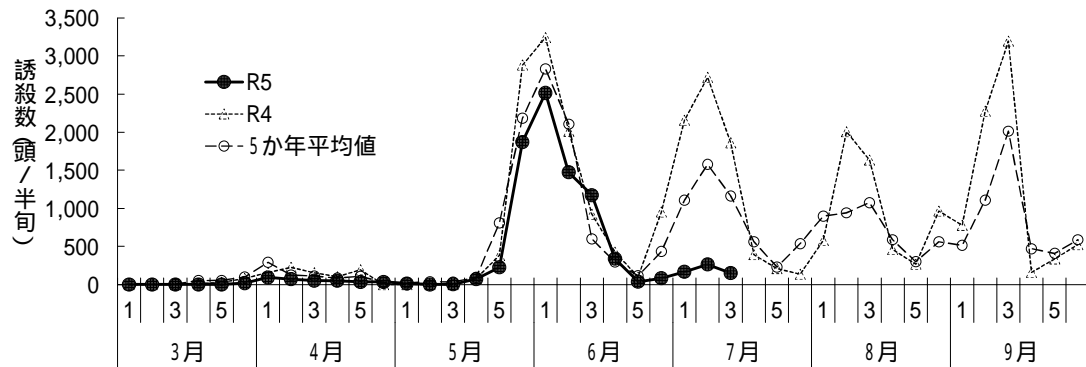


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵町:フェロモントラップ) (月・半月) 茶業研究室調べ

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期の目安は、脱皮阻害剤（IGR剤）は発蛾最盛期のころ、その他の薬剤は発蛾最盛期の約7～10日後である。
- イ 三番茶を摘採中あるいは近日中に摘採予定の圃場では、摘採終了後に防除を実施する。
- ウ 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準 P428～429の「作用機構による分類（IRAC）」参照）の薬剤は連用しない。

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容：発生程度 少

(2) 予報の根拠

- 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、発生を認めなかった（寄生葉率 0.5%、発生圃場率 10.2%）。

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容：発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 7月前期の巡回調査（12筆）の結果、たたき落とし虫数（A4版トレイ）は1.3頭（4.0頭）、発生圃場率は58.3%（73.8%）であった。
- イ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- 薬剤抵抗性発達防止のため、同一系統（令和5年長崎県病害虫防除基準

P 4 2 8 ~ 4 3 1 の「作用機構による分類 ( I R A C )」参照) の薬剤は連用しない。

#### 7 . クワシロカイガラムシ

( 1 ) 予報内容：発生程度 並

( 2 ) 予報の根拠

7 月前期の巡回調査 ( 1 2 筆 ) の結果、寄生株率は 5 . 8 % ( 6 . 2 % ) 、発生圃場率は 3 3 . 3 % ( 3 5 . 8 % ) であった。

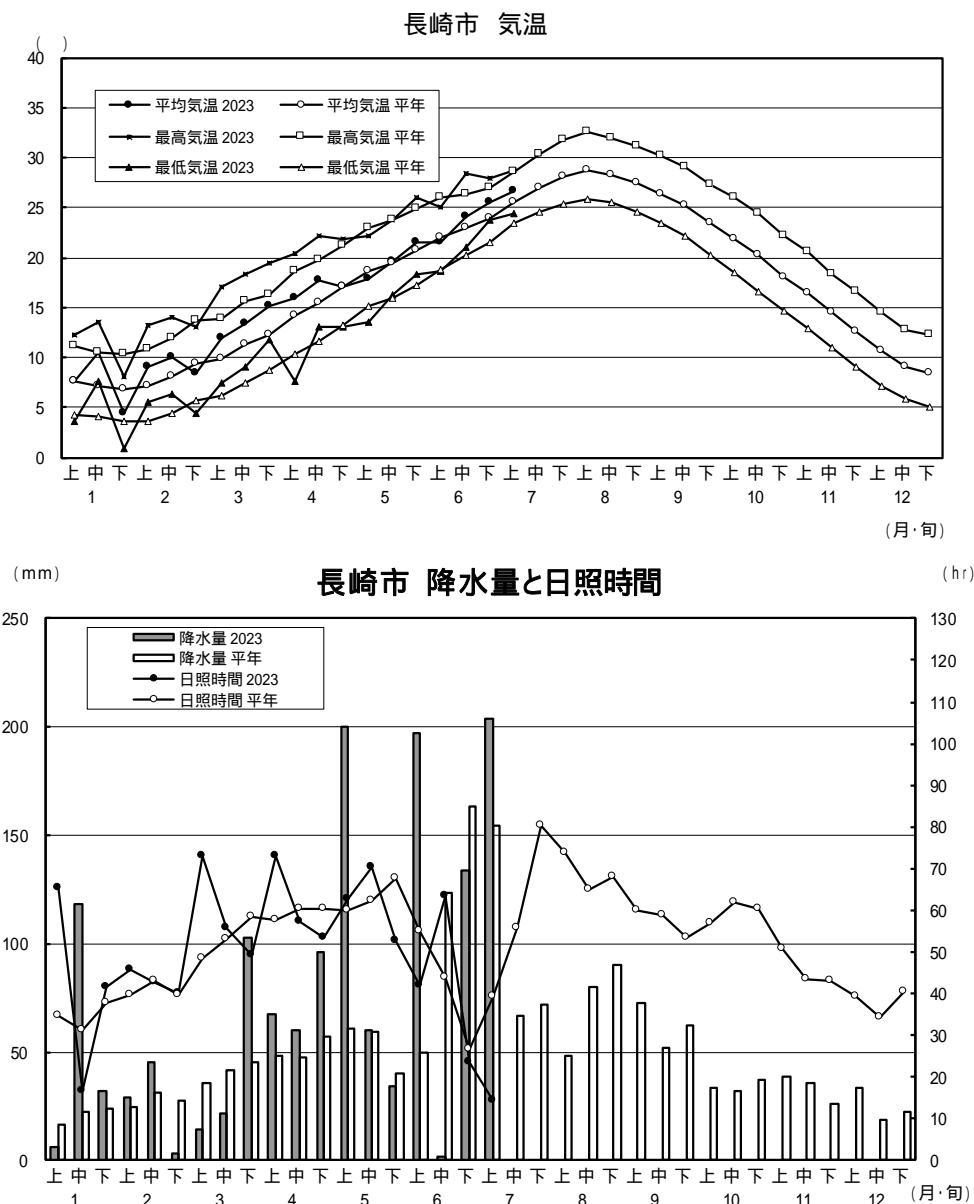
【参考】

(令和5年7月13日発表 1か月予報 福岡管区気象台)

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	30	60
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

予報対象地域：九州北部地域

令和5年の気象経過(長崎地方気象台)



6月から8月までの3か月間を「農薬危害防止運動月間」と定め、農薬事故を防止する運動を実施しています。

長崎県病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

「長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室

(長崎県病害虫防除所) ホームページ」アドレス：<http://www.jpnpn.ne.jp/nagasaki/>

この情報に関するお問い合わせ

長崎県農林技術開発センター 環境研究部門 病害虫発生予察室

(長崎県病害虫防除所) TEL：0957-26-0027

